

オンライン世界大会 被爆者としての証言と訴え

日本被団協事務局次長
和田 征子

被爆 75 年の今年、オンラインによる初めての世界大会で発言の機会を与えて頂き感謝申し上げます。日本被団協の和田征子と申します。私は長崎で 1 歳 10 カ月の時に、爆心地から 2.9km の家の中で被爆しました。山で囲まれた長崎の地形で、火傷や外傷はなくこれまで生きることができた一番若い被爆者の一人です。

当時の記憶がない私は、母が折々に繰り返し語る話を聞いて育ちました。家の窓ガラス、土壁、格子戸など爆風によりすべて粉々になり家の中に 30 センチ位 つもったこと。山肌に見たのは、爆心地から火を避け、山越して市街地にうごめきながら下ってくる蟻の行列のような人々。大学の講堂の床一面に並べられた火傷、怪我の人々の体についての無数の親指大のうじ虫の数。道路に放置されている遺体はゴミ車に放り投げ回収され、手足が人形のようにとび出た荷台に満載され、家の隣の空き地で、朝から晩まで焼かれたこと。その臭いにも麻痺し、人としての感覚がなくなっていったこと。人間の尊厳とは何でしょうか。人はゴミのように焼かれるために生まれてきたのではありません。

原爆投下後、アメリカの占領下で、厳しい報道管制が布かれ、被爆者は自分たちのからだ、くらし、心の苦しみ、痛みの原因を知らされることなく、日米政府から 10 年間放置され、沈黙を強いられ隠れるようにして生活しました。何の支援を受けることもなく、投下の年だけで、数字としてだけで残る死者数は、広島で 14 万人 長崎で 7 万人 その多くは老人、女性、子どもを含む非戦闘員でした。その後も死者数は増え続けました。

そして今日まで、かろうじて生きながらえてきた被爆者は平均年齢 83 歳となりました。その苦しみ、それは深く、今なお続くものです。愛する者の死、生き残ったという罪悪感、脳裏に焼き付いたままの光景、音、匂い、原因のわからない病気、生活苦、世間の偏見、差別、諦めた多くの夢。それは人種、国籍、年齢、性別を問わず、きのこ雲の下にいた者に被爆者として死に、また生きることを強いるものでした。当時胎児であった者たちにも、さらに被爆者の子どもたちにも、今なお、身体に心にその影響は及んでいます。

1956 年の被爆者唯一の全国組織である日本被団協結成から 64 年間、被爆者は「自分たちの体験をどうして、自らを救うと共に、人類の危機を救おう」との決意を誓い合い、核兵器のない世界を願い、国内外で体験を語り、忍耐強く歩んできました。「いかなる条件の下でも」、この「非人道兵器」は使われてはならない。被爆者の切なる願いです。

原爆をつくった者がいる、それを使った者がいる、そしてその威力や結果を喜んだ者がいる。許せない思いがありました。しかし被爆者はそれに対して報復を願ったことはありません。仮にも三度核兵器が使われることになれば、その結果を喜んで見届ける者は、もはやいない、と被爆者は知っているからです。すべてがなくなった原子野で、国力や地位や名誉を誰が誇ることができるのでしょうか。抑止のためで、使わないと言いながら作り続ける核兵器は、人類の負の遺産に他なりません。核兵器による力は正義ではありません。

2016年4月、私たち被爆者は、核兵器廃絶を訴える国際署名を始めました。これまで1050万以上の署名を国連に届け、核兵器禁止条約の採択の大きな推進力となってきました。2017年の核兵器禁止条約の採択に、被爆者は生きていてよかった、と心から喜び合いました。長年叩き続けてきた、錆びついた、大きな鉄の扉がやっと開き、一筋の光が入ってきたと、感じました。そして今、この扉をもっと広く開けるのは、各国政府のみなさんの決断であり、それを動かす市民の行動です。核兵器禁止条約の発効に向けて、そしてその先にある核兵器のない世界を目指して、残された時間が多くない高齢の被爆者は、さらに皆さまと共に力強く歩んでまいります。

有難うございました。